

沖繩発 教育学としての家庭科教育

富士栄 登美子

(琉球大学教育学部助教授)

一、雪のひとひらの重み

六月二十三日は、沖縄戦で亡くなった方々の慰霊の日です。公立学校は休みとなり、各地で慰霊祭が行われました。

『八度目の年おんな』（岩波書店）の中で櫛田ふきさんは「雪のひとひらの重み」を紹介しています。雀が鳩に「雪のひとひらの重さってどれくらい？」と聞くと、鳩は「重さなんてないさ」と答える。すると、雀が「おかしいわ、静かに散る雪を数えて、三七四万一千九百五十二数えて、その次にひとひらが落ちてきたら、枝が落ちてしまったの」と言う。「ああ、そうか、やっぱり、本当に世界が平和になるためには、あとひとひらが足りない。あと一人の力が足りないんだな」と鳩が悟ったというアメリカのクリスマスの童話です。婦人

団体会長でもある櫛田さんは、次のように語っています。

民族の自立とか、独立とか、安保とか、基地とか、核兵器廃絶とか言ってきたけれど、一度も憲法九条を話さなかった。戦争放棄をね。私の旗は今でも憲法九条なの、九条の旗を高く掲げるの。戦争放棄すれば核兵器もいらない、基地もいらないんだから。「すべての婦人運動は平和運動をもって完結する」（エレンケイ）、平和が大事なね、平和のために、憲法九条を日本中、世界中に広めていただきたいの。

七十五年も前に、既に夫婦別姓を貫いた女性解放の先駆者平塚らいてうは、「元始、女性は大に太陽であった。……」の不滅の名文を残しました。女も自ら輝く太陽になれ、太陽の光を借りてやっと輝く青白い月みたいではだめと言った、

らいてうは、次のようにも述べています。「孤独の時間がないとだめ。自分がどんな人間か自覚する。自分を愛し、育てるのは自分、勤勉で明朗な人間になるには、孤独の時を作って自分と向かい合うことね」。

二、自由と孤独と

単身で赴任してきた私は、いやでも孤独と向き合うことになりました。しかし、いつまでたっても勤勉で明朗な人間になれません。孤独から逃れようとしていたんだと思います。沖縄の南の島へ行こうと、北海道の北の国へ行こうと孤独はついてくるのです。そんな時、アイヌの音楽に出会いました。それは私にとって、効き目のある音の薬でした。私の心を和らげ、落ち着かせてくれました。その曲は「Regnum」でした。その時から、孤独を楽しむことが出来るようになりました。本当の自分が見えてきたのだと思います。

満足出来る授業が出来た時は、教壇から一番後ろの出口までの道のりが、まるで花道に感じるのです。そして、教官室に戻り一人になった時、幸せを感じることが出来ます。あんなに嫌だった一人がとても居心地のいい条件になっていったのです。そして、勤勉で明朗な人間に一步近付けたような気がします。こんなふうに思えるようになるまで長かった。今の子どもたちが、最も恐れていることは、一人ぼっちになることです。大学生も。私ですらそうでした。

三、學而不厭

朝、八時過ぎ図書館の前を通ると、大きなデイゴ（県花）の木の下で、開館を待っていた学生がぞろぞろと入って行きました。他大学では見られない光景ではないでしょうか。その図書館の入り口には、「学び、学び、そして学ぶ。決して飽きるということはない。これが私の日常だ」という意味の言葉「學而不厭」が刻まれています。論語の中の一説で、この碑は湯川秀樹博士が本学を訪れた時、揮毫されたものです。

四、教育という仕事

私が教えている学生は、教育学部の学生です。教育学士となる人材です。教育学を専門とする学生であるわけです。「教育とは何か」を常に問い掛け、人間らしい教育者を育てることを目指して、教育学としての家庭科教育に当たらなければなりません。教師を専門職とするならば、医師になるために、医学部や医大に進まなければならないのと同じように、教師になるためには、教育学部や教大で学ばなければならいはずで、教育に時間と予算を惜しんでいたのでは、教師の資質向上は望めません。

教育学部の学生は、教官のする授業を受けながら、その授業法をインプティングしています。誰もいなくなった十時過ぎ、シーンと静まりかえった広い講義室で、かつて京大の教官がしたように、私も講義の練習をしてみました。黒板

というカンバスに表現します。クリエイティブな授業にしたいと工夫します。そして、講義の最後の授業で、大学が準備した評価項目に従って学生が授業に対して評価します。それは授業担当者が保管します。

小教免も、中教免も、両方取得する学生は、三年生の時と四年生になってからと、二回の教育実習をします。成長していました。良くなっているのです。うれしかったですね。若い学生たちは私がこれまで犯してきた過ちに気付かせてくれます。

教育の原点がベースにあって教育学としての家庭科教育が成り立ちます。では、教育の原点とは何でしょう。教育という仕事は、初めに子どもたちの良さや可能性を信じるのが出来なくては、出発することは出来ません。共に育ち合おうとする心、人間らしい心を持った人を育てる仕事です。人を裁くではありませんが、人が人を評価するのです。大変な仕事だと思っています。

両親が教師で、家に帰っても学校にいるみたいで、よく生徒会室に逃げていたこと、教師の二面性やうそなど裏を見ているので、教師になりたくないことなどを話してくれた学生がいます。今、自分がしていることは、次に何が起きるか分からないけれど、その時の準備なのだと思います。楽になるよと申しました。それは、私自身が振り返ってみますと、これま

でしてきたことは、琉大に来て、家庭科教育を教えるための準備だったんだと思えたからでした。院を出てすぐに大学に入っていたら、今のような授業は出来なかったと思います。

五、教育ボランティア

私は、授業をしながら、沖縄の英知の中心となる人材を育てていると自負しています。「人間とは何か、人間らしいとは何かを学生たちと一緒に考えたいと思います」と言って前の職場を離れました。ほんの少しですが、これが人間らしい生き方なのかもしれないと思えるようになりました。知識や知恵、心や物など、何か人に与えるものがある時、優しい心になり、人間らしさを感じ取ることが出来るような気がします。

琉大教育学部では、^{平成}八年度の秋に、全国に先駆けて教育ボランティアを実施しています。小学校の算数の授業にティームティーチングの形を取りながら勉強させてもらっています。採用試験に合格していた家政教育の学生も参加していました。また、実習のある家庭科教育ならなおのこと、複数のスタッフが欲しくもあり、実現出来ればいいなと思っています。福祉国家のスウェーデンには、ボランティアはなく介護やケアは専門家がやるものという感覚だそうです。私の研究室の学生がボランティアで、毎週通っている老人ホームの所長さんは、専門的な知識や技術がなくてもやれることはいっぱいあ

るとおっしゃってくださいました。その方は、家庭科の授業の一環で訪問した中学生からの「給料はいくらですか」という質問に対して、「お金で買えないたくさんのものをもらえますよ」と答えてくださいました。

先日、沖繩までお越しくださいました足立「幸」先生の講演の中で、「一緒に」というキーワードが心に留まりました。食べる時だけでない、作る場所から「一緒に」を提案なさっておられました。社会の核となる家庭は男女が一緒に作るものです。家庭科教育は、homemaking education と訳されます。つまり、家庭を建設する教育なのです。仕事の時は個々離れていても、家庭に戻れば一緒にやりたいものです。子育ても、食卓を整えることも、おしゃれも、住宅設計も、家計も、何もかも。八年度前期の講義で結婚する理由を聞いたことがあります。九〇%以上の学生が一緒に生活したいからと答えています。一緒に生きることによって幸せを感じることに出来る人だから、それこそ一緒にいたのです。そのためにも、教育の機会均等からも、男子にも家庭科教育を受ける機会を与えたいと思います。

私の家庭は、五人の家族が四か所に住んでいます。でも、ばらばらではなくちゃんとつながっています。一緒に生きています。長男は家庭科のない高校時代、次男は高一から家庭科を履修しました。夫と一緒に暮らしている中二の娘は難し

いと言われる中学時代ですが、とても素直に、父娘の関係を保ってくれていて、夫の本当の性格を私に教えてくれたりします。

失われていくものの中に、なおかつ失われないものがあります。沖繩戦の時、食べるものがなくて他の人の畑に入った人がいました。その畑の人は、「一緒に生き延びましょうね」と言って、一緒に食べたという新聞の記事を読んだことがあります。共に生きること人間らしさを感じます。沖繩は決して貧しくない、リッチハートを持った人たちの多い島です。

沖繩の言葉の言い回しに「……しましょうね」があります。初めて聞いた時「Yes……」の意味かと思いました。が、「Yes……」を意味することが多いようです。例えば、ホスピタルで初診の時、問診票に「書きましょうね」と言われ、書いてくださるかかとじっとしていたことがあります。つまり「書いてください」の命令形ではなく、「書いていただけますか」の依頼形なのです。言葉の表現の中に、相手を敬う心が含まれているのです。

家政教育専修の学生は、夜遅くまで、採用試験勉強に、卒論研究に、一緒に取り組んでいます。沖繩コンプレックス？を見事に乗り越え、たくましく、明るく、エネルギーに生きています。アジアの沖繩、世界の沖繩を目指して。